

日光門前における空間と営みの処方箋による町家・町並みの再生計画

Regeneration of Machiya and Townscape applied with Prescription of Space and Life in NIKKO-MONZEN

日光門前 空間 営み 町家 町並み

1. 序 日光門前では、長期にわたる道路整備が進められており^{注1)}、一部の区間では整備が完了し、今後は東照宮手前の伝統的な町家が残る地区へと整備が進む予定で、景観形成を考える重要な時期を迎えている。街道沿いには、人々の営みが反映された多様なタイプの町家があり、道路整備を踏まえた次世代の町家と町並みを考え直す必要がある。そこで本計画では、今後整備予定の鉢石地区の町家を、空間と営みの視点から分析し、町家タイプと町並みの課題となる症状を明らかにする。そして、症状に対する処方箋を組み合わせた新築・改修・空地デザインを計画することで、空間と営みの処方箋による町家・町並みの再生計画を提案する。

2. 日光門前の概要

2.1 各町の概要 JR日光駅から日光東照宮までの間に位置する日光門前は、日本橋から続く日光街道の終着点の宿場であり、世界遺産「日光の社寺」の門前町として賑わう(図1)。街道の道路整備が一区間あたり約5年をかけて進んでおり、現在、3区間目の御幸町まで進んでいる。今後、下鉢石町・中鉢石町・上鉢石町へと整備が進む予定で、整備完了区間からの経験も踏まえた準備や、整備手法の検討が課題となっている。

2.2 交通の変遷からみた日光門前の歴史

道路整備

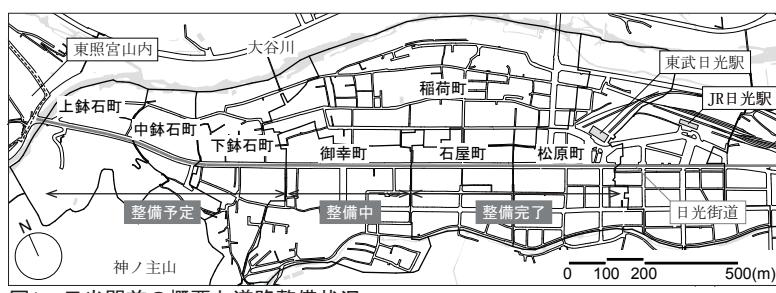


図1 日光門前の概要と道路整備状況

表3 付属的要素

下屋あり	看板建築	付属要素				
		付け庇	屋上テラス	ビロード	パランダ	他
25	26	43	4	8	5	2

表3 注) らしさ要素を□で示す(以下同様)。

表6 設え要素

屋根看板	看板			日除け			灯り			その他		
	大型看板	壁面看板	袖立て看板	暖簾	太鼓幕	オーニング	提灯	灯籠	行燈	水鉢	ベンチ	植栽
40	7	5	26	34	17	17	3	3	6	5	5	2

表4 規模

三階以上	二階		平屋										
	25	72											
	13	5	3	2	5	3	3	29	28	17	8	9	17

表5 町家要素

外壁素材	開口部			屋根装飾			壁面装飾				
	木製建具	面格子	漆喰	和瓦	影盛	化粧垂木	鎖桶	付け柱	陳列棚	彫建	
サイディング			塗喰張り	なまこ壁	土壁	ガラス張り	影盛	31	15	5	3

表7 敷地構成

配置	別棟		
	前面	セントラルパック	裏
		蔵	祠

建築計画研究室 176408A 高橋広野

は、江戸時代の門前町の形成以来、交通手段の変遷とともに繰り返されてきた(表1)。江戸時代の石段の続く道から、明治時代には人力車・牛車の普及により傾斜のある道になり、明治末には市電の開通により線路が敷かれた。そして、鉄道の開通や車社会化により、現在では当時の約3倍の幅である。現代の道路整備は、歩道拡幅により再び歩行者空間の充実を目指すものと考えられる。

2.3 日光門前におけるまちづくりの現状 古くから伝わる山岳信仰や数百年続く祭などの伝統行事から「祭(いの)りのまち」がテーマとして掲げられ、これからのまちづくりの方針として示されており^{注2)}、今あるまちの活かし方、未来への繋げ方が課題である。

3. 空間と営みからみた日光門前の町家

鉢石地区の街道沿い123敷地、町家106棟を対象に調査を行なった。

3.1 日光門前の町家における空間

屋根形状(表2)、下屋の有無・看板建築等の付属的要素(表3)、規模(表4)、外壁素材・開口部・屋根装飾・壁面装飾等の町家要素(表5)、看板・日除け・灯り等の設え要素(表6)、及び敷地構成(表7)を抽出し、それらの日光門前に特徴的な要素を「らしさ要素」、その他の要素を「非らしさ要素」に分類することで、町家の空間タイプを導いた(表11横軸)。らしさ要素を持ち、切妻や入母屋等の勾配屋根を持つ日

表1 交通の変遷からみた日光門前の歴史

年代	江戸	明治	明治末	大正～現在
交通	徒歩、駕籠	人力車、馬車	路面電車	自動車、鉄道
町並み				

表2 屋根形状

(123敷地、106建物)			
切妻	寄棟	入母屋	陸屋根
平入り	妻入り	入母屋	陸屋根
49	24	10	14

表8 用途

用途	別棟		
	前面	セントラルパック	裏
		蔵	祠

表9 生業

日光の生業 / 現代的生業	別棟		
	前面	セントラルパック	裏
		蔵	祠

表10生活・仕事・祭り

生活	別棟		
	前面	セントラルパック	裏
		蔵	祠

光勾配屋根型（A1～A4）、日光看板建築型（B1）、日光高層型（C1）、現代勾配屋根型（A5）、現代看板建築型（B2）、及び現代高層型（C2）の9つの空間タイプがみられた。

3.2 日光門前の町家における営み 前節と同様に、用途（表8）、生業（表9）、生活・仕事・祭り（表10）を抽出し、町家の営みタイプを導いた（表11縦軸）。職場と住居が一体で、日光的生業を営む職住一体日光生業型（a1）、職住一体現代生業型（b1）、職住分離日光生業型（a2）、職住分離現代生業型（b2）、及び職住分離専用住宅型（c）の5つの営みタイプがみられた。

3.3 空間と営みからみた日光門前の町家タイプ 以上から、空間タイプと営みタイプを併せて検討することで、日光門前における7つの町家タイプを導いた（表11）。職住一体の営みがらしさ要素を持つ二層勾配屋根の町家で営まれる職住一体日光町家型（I）、職住一体の営みでらしさ要素を持つ看板建築の職住一体日光看板町家型（II）、職住一体日光高層町家型（III）、職住一体看板町家型（IV）、職住分離日光町家型（V）、職住分離高層町家型（VI）、及び職住分離住宅町家型（VII）といった日光門前にかける町家タイプが明らかになった。

4. 日光門前の町並みと処方箋

4.1 日光門前の町並み

3章で導いた町家タイプをもとに町並みの分析を行なった（図2）。上鉢石町においては、高層の町家タイプが集中する箇所や、日光的な町家タイプが集中し、連続する町並みが形成されている箇所があることが明らかになった。一方、中鉢石町や下鉢石町においては、異なる町家タイプが並び、町並みの連續性を欠いている箇所（計画地1）、歯抜けのヴォイドを生じ、日光的町家タイプの並びにある非日光的な空き施設（計画地2）、空地の連担と周辺町家のセットバックによって、町並みが大きく崩れている箇所（計画地3）等の症状があることが明らかになった。

4.2 空間と営みの処方箋

以上の分析から、敷地の課題となる症状を解決するための処方箋を提案した。新築町家や敷地連携等の【土地利用】、躯体保存や石蔵活用等の【既存利用】、前庭や坪型東屋等の【敷地構成】、切妻平入や下屋の付加等の【外形構成】、透過ファサードや通り土間等の【空間構成】、及び石積みベンチや水場等の【設え】といった空間の処方箋と、職住一体やゲストハウスといった営みの処方箋を提案し、これらの組み

表11 空間と営みからみた日光門前の町家タイプ

空間タイプ	(106建物、空き家・空き店舗8、類型外5)																
	らしさ要素なし(32)								らしさ要素有り(33)								
営みタイプ	平屋・二階(53)				三階以上(8)				平屋・二階(22)				三階以上(10)				
	A1 切妻平入下屋有型	A2 切妻平入下屋無型	A3 切妻妻入型	A4 入母屋寄棟型	B1 看板建築型	C1 高層型	A5 勾配屋根型	B2 看板建築型	C2 高層型	(8)	(14)	(8)	(13)	(10)	(7)	(15)	(10)
日光生業型 a1	I 職住一体日光町家型 (42)	I 1 (7)	I 2 (10)	I 3 (5)	I 4 (7)	II 職住一体 日光看板町家型 (3)	III 職住一体 日光高層町家型 (4)	V 職住分離日光生業町家型 (3)	V 1 (4)					IV 職住一体 看板町家型 (3)			
日光生業型 a2														VI 職住分離 高層町家型 (2)			
現代生業型 b1		I 5 (1)												VI 1 (9)			
日光生業型 a2																	
現代生業型 b2																	
専用住居型 c														VII 1 (6)			
30																	



図2 町家タイプからみた日光門前の町並みと計画地

合わせによる町家・町並みの再生計画を行なった。

5. 日光門前における町家・町並みの再生計画

5.1 職住一体型の次世代町家〈新築〉 異なる町家タイプが並ぶ空地に、アトリエを営む居住者を想定した職住一体型次世代町家を計画した（図3）。異なる町家タイプの中に、軒下空間の連続や、街道からの引き込みといった共通性を見出し、透過ファサードと下屋の付加による街道からの連続性や、通り土間と光の下屋による街道からの引き込みを持つ町家を提案した。建物前面は街道に開放し、通り土間の扉の開閉により、街道から中庭まで抜ける大空間として利用可能で、イベントの開催等にも対応した。閉じられた居住空間を、職住一体の現代的な暮らし方と関連付け、まちに開放することで、街道との豊かな関係性を構築した。

5.2 ゲストハウス〈改修〉 類似した町家タイプに挟まれた角地の陸屋根型空き施設に、飲食店・ゲストハウス・工房といった用途の複合と、躯体保存による改修型次世代町家を計画した（図4）。隣接する日光的町家の要素を抽出し、下屋の付加による軒下空間の連続や、通り土間による空間の繋がりを持つ町家を提案した。登録有形文化財へと通じる角地であることから、L字型に建物

側面を開放し、ベンチや日除けを設えることで、居場所を創出した。連續性を欠いた陸屋根型の町家を、多様な営みの複合と隣接要素の継承によって、町並みとの連續性を持つ次世代営み型の町家として再生した。

5.3 町並みと一体化した広場〈空地デザイン〉

連担によって町並みが大きく崩れた空地に、敷地の連携による一的な空地デザインと、祭りの場としての空地活用を計画した（図5）。周囲の町並みとフロントラインを揃えため、大谷（だいや）石の石積みベンチと日光杉格子を組み合わせた埠型東屋を提案した。また、収納可能な仮設屋台や家具を提案し、収納庫として敷地内の石蔵を活用した。町並みを崩す大きなヴォイドを、隣接する土地の一的なデザインによって、フロントラインを整えることで、町並みの再生と新たな居場所を創出した。

6. 結 本計画では、日光門前における街道沿いの町家を、空間と営みの視点から分析し、現状の町家タイプと、町並みの症状を明らかにした。さらに、異なる町家タイプの並び、町並みの連續を乱す町家タイプ、及び空地やセットバックによる大きなヴォイドといった症状に対し、空間と営みの処方箋を組み合わせた新築・改修・空地デザインの計画を行い、日光門前における町家・町

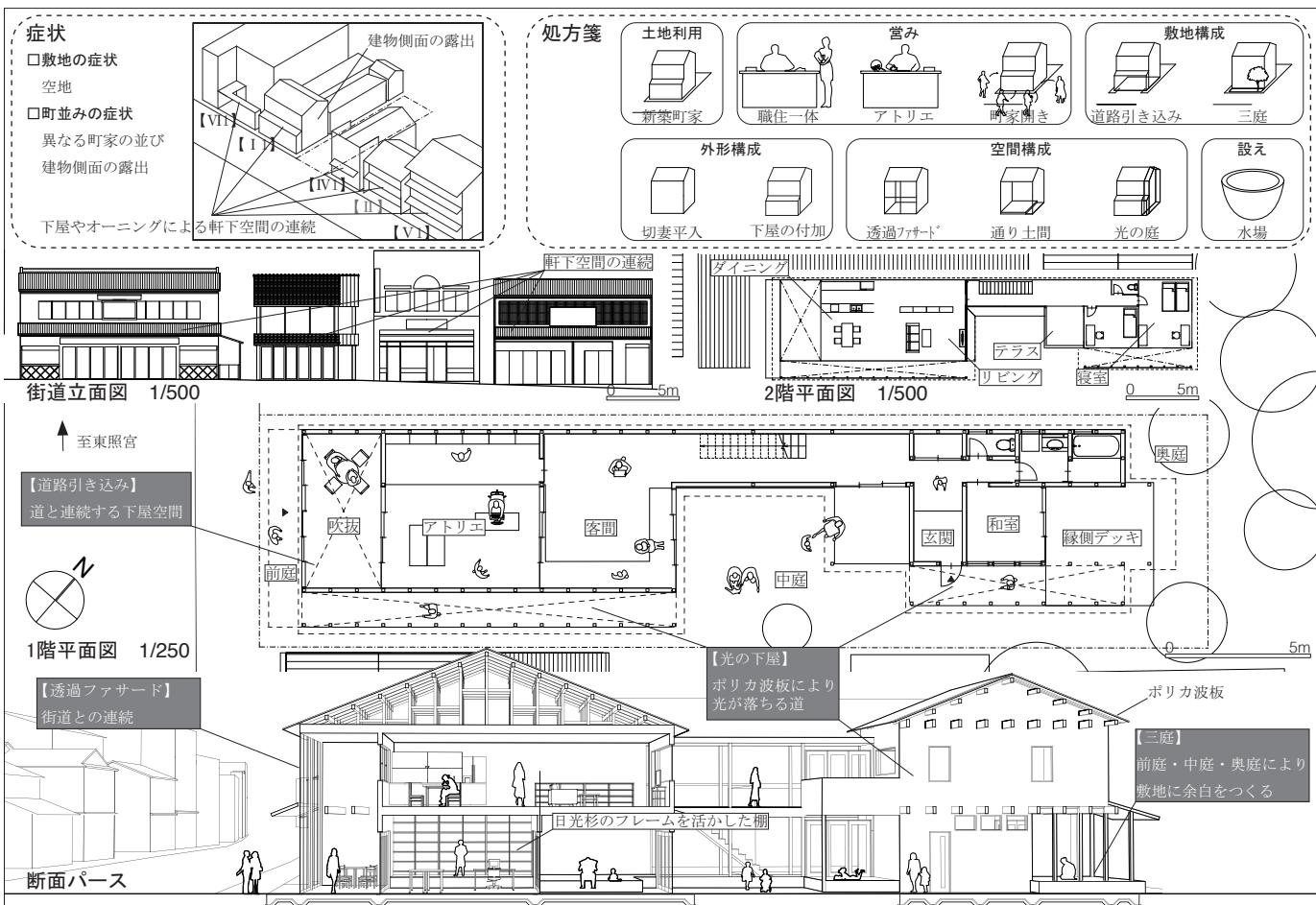


図3 職住一体型次世代町家（計画地1）

並みの再生計画を提案した。こうした症状の分析から導き出される処方箋の組み合わせによる設計手法によって、大きく変わりつつある町並みにおいて、「日光らしさ」を失うことなく、これまでを次世代へと繋げる町並みを

形成することができると考えられる。

注

- 1) 国際観光都市にふさわしい景観形成を図り、快適で安全な歩行空間を整備するため、歩道の拡幅及び電線類の地中化を行うもので、2003年から始まった。
- 2) 2015年、日光東町まちづくり推進委員会ワーキンググループによって、まちづくりの基本となる「日光東町まちづくり規範」が発行された。

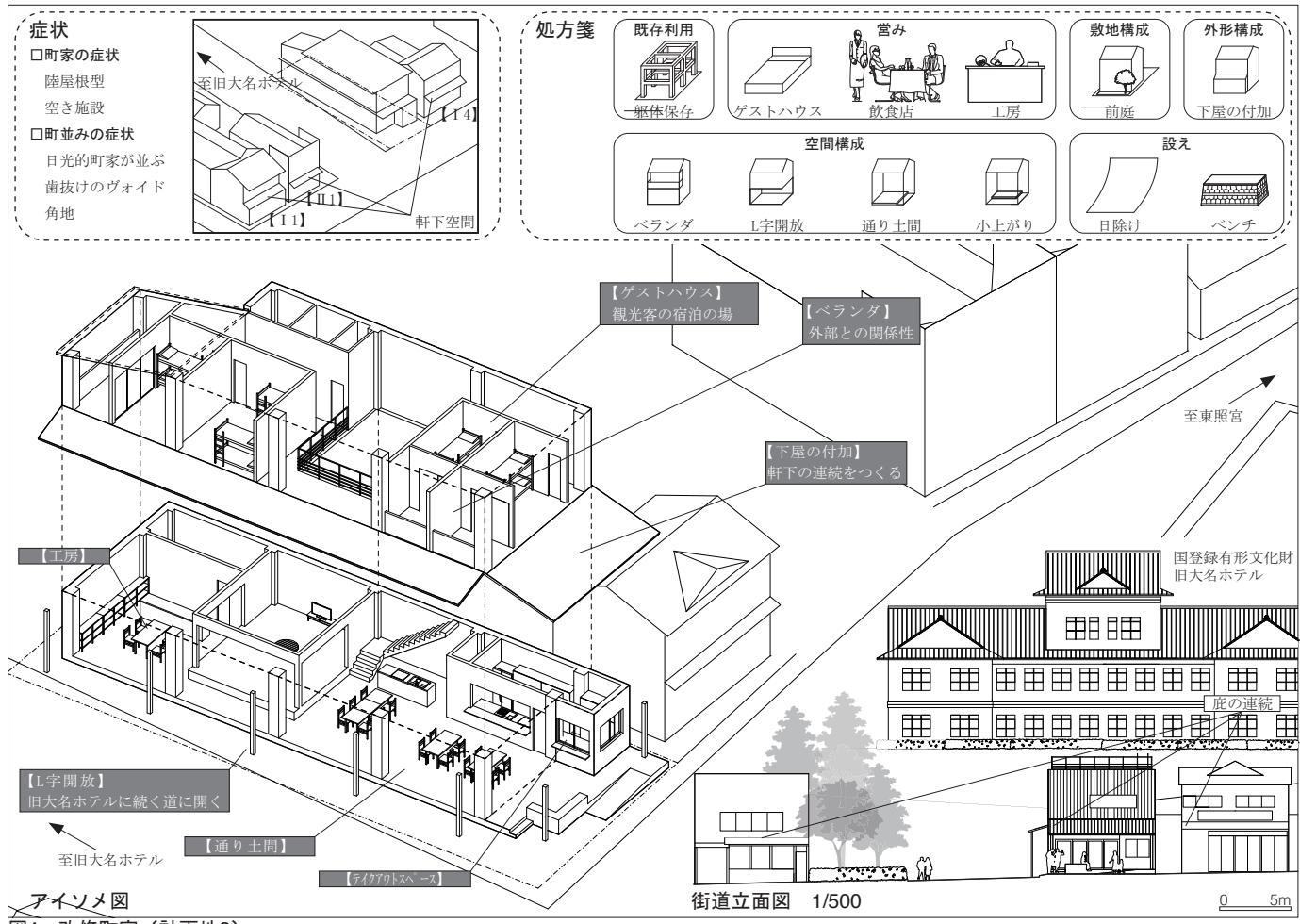


図4 改修町家（計画地2）

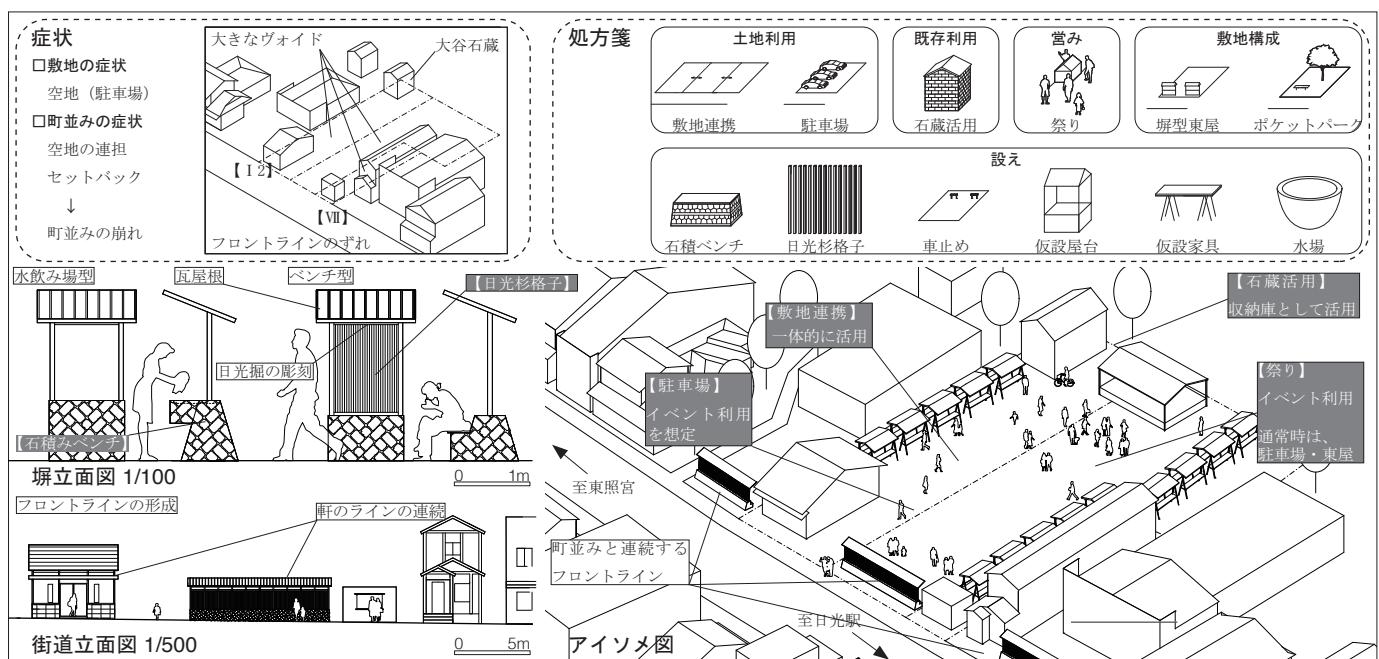


図5 空地デザイン（計画地3）